

東京音楽大学付属民族音楽研究所刊行物リポジトリ

Title	アジアの発掘口琴チェックリスト (2) : 薄板状の口琴 (2)
Title in another language	Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (2) - Lamellate Harps (2)
Author(s)	直川礼緒 (TADAGAWA Leo)
Citation	伝統と創造=Dento to Sozo, Vol. 6, p. 57-68
Date of issue	2017-03-25
ISSN & ISSN-L	Print edition: ISSN 2189-2350, Online edition: ISSN 2189-2482, ISSN-L 2189-2350
URL	http://www.minken1975.com/publication/IE_B06201605.pdf

アジアの発掘口琴チェックリスト(2)：薄板状の口琴(2)

Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist (2) - Lamellate Harps (2)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

ユーラシア大陸を中心に世界中に分布する、始原的な楽器である口琴は、いつごろ、どこで、どのように生まれたのだろうか。本稿では、昨年の論考「アジアの発掘口琴チェックリスト(1)：薄板状の口琴(1)」の補遺・続編として、同稿発表以降に情報が明らかになった、紀元前20～14世紀のものと考えられる、現時点で世界最古の中国遼寧省建平県にある水泉遺跡出土の口琴を採り上げる。

また、陝西省鳳翔県の秦公一号大墓より出土の、口琴のケースと考えられる紀元前6世紀の「墨書竹筒」にも触れ、さらに、地理的にはヨーロッパの東端に位置する、ロシア連邦バシコルトスタン共和国およびカマ川地域の、非常にユニークなA1タイプのものを含む薄板状の口琴群について概観する。

キーワード：口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、北方アジア Northern Asia

7. 中国遼寧省 Liaoning, China [12, 13]

昨年の論考以後、いくつかの新たな情報が寄せられた。中でも特筆すべきは、中国遼寧省の朝陽市建平県朱碌科鎮にある水泉遺跡から出土した、現時点で世界最古の口琴である³⁰。方建軍の論文「秦墨書竹筒与乐器“簧”」（方2008）に参考的に記載されている³¹口琴の、所在地や写真など、より具体的な情報が判明してきた³²。

遼寧省は、中国東北部に、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）と、内蒙古自治区に挟まれる形で位置している。旧満州国のあった地域の南端に相当し、省南東部は遼東半島を境に海域の分かれる黄海と渤海に面するが、建平県は省の西端の朝陽市の中でも北西部にあり、内蒙古自治区に突き刺さるように飛び出している。

遺跡に関する簡単な報告書（遼寧省博物館、朝陽市博物館1986）によれば、発掘は1976年から1978年にかけて行われた。夏家店下層文化に属する遺跡で、時代的には、夏（紀元前2070?～1600?）から商（紀元前1600?～1046?）、遅くとも西周（紀元前1046～771）初期のものと考えられる（方2008）。

口琴は、何点発掘されたのか、正確には不明である³³が、朝陽市博物館に二点が展示公開されている（fig. 16）³⁴。「すべて」骨製の薄板状で、うち一点の採寸は、「全長93mm、広い方の端の幅が16mm、狭い方が10mm。広い方の端に小さな穴があり、中央部には長さ43mmの弁が切り出されている」（方2008）。この数値が、展示の二点のうちのどちらを測ったものな

のか、あるいは展示されていないものを測ったのか、はっきりとは分からないが、全長に対する弁（残存している部分。先端は欠損している模様）の長さ、両端の幅の比、引き紐を結ぶための穴の存在への言及などから考えると、写真中の大きい方の楽器を計測したものである可能性が高いと思われる。こちらを仮に [12] とし、小さめのもう一点を [13] とする³⁵。

[12] の全体の形状は、縦長の等脚台形で、振動弁は長方形に近いが、枠側の形状から判断すると、失われた先端部が少々細くなっていた模様。幅の広い方の端のそばに、引き紐を取り付けるための穴があげられている。全体は、少々反っている (fig. 17)。コルトヴェイトの採寸では、全長 95mm、幅 10～18mm、厚さ 0.6mm (Kolltveit 2016a 第十回国際音楽考古大会での口頭発表。註 34 も参照)。

[13] は、長辺が全体に渡って丸みを帯びて外側に膨らんでおり、凸レンズ型とも言えるだろうか。ハカスの [08] (直川 2016) とよく似ている。振動弁は、先の細い、二等辺三角形に近い形。全体は、わずかに反っている。コルトヴェイトの採寸では、全長 81mm、幅 4～10mm、厚さ 0.6mm。引き紐を取り付けるための穴は、写真では確認できないが、その位置が白い物体で塞がれているように見える。保存処理の過程で塞がれた可能性を、コルトヴェイトは示唆している (Kolltveit 2016年の口頭発表)。おそらく双方とも、[01]～[09]と同様、A3bタイプ³⁶の、北方の紐口琴の流れに属するものと考えて間違いないだろう。なお博物館の展示のキャプションでは、これら口琴の厚さは 1mm に満たないことが記されている (fig. 18)。

年代に関して、同キャプションは、「夏商 (紀元前約 2146～1029年)」のものであるとする。コルトヴェイトは、紀元前およそ 2000～1200年としており (Kolltveit 2016a,b)、また紀元前 2000～1400、2200～1600などの説も紹介している (Kolltveit 2016年の口頭発表)。幅を大



fig.16 中国遼寧省朝陽市建平県水泉遺跡出土の口琴。上から [12][13]。朝陽市博物館の展示。実際の展示状態を撮影した写真を、180度回転した (直川 1996 中の註 12 の原則に従う)。このため、光の当たり方や、楽器の見え方が少々不自然になっている。写真提供 : Kolltveit



fig.17 同上。下から [12][13]。朝陽市博物館の展示状態を、横方向に近い斜め上から撮影したもの。写真提供 : Kolltveit

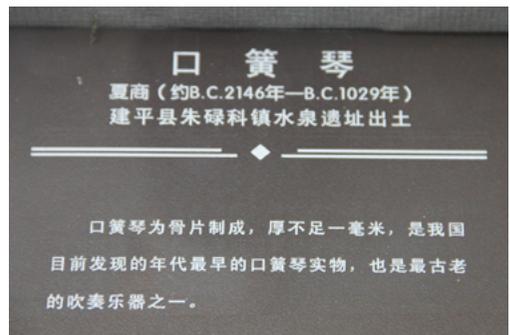


fig.18 同上キャプション。写真提供 : Kolltveit

きくとして紀元前 22 ～ 11 世紀としても、内蒙古自治区赤峰市の出土例 [01] の紀元前 8 ～ 4 世紀をはるかに（少なくとも 200 年、場合によっては 2,000 年近くも）上回る、世界最古の口琴の二例、ということになる。

8. 中国陝西省 Shaanxi, China [14]

口琴そのものの発掘例ではないが、口琴が存在したことの有力な証左となるのが、中国陝西省宝鷄市鳳翔県南指揮の秦公一号大墓から出土した、口琴のケースと考えられる墨書竹筒である。この竹筒は、従来は笙や竽の管と考えられていた（王 1997, 2000）が、口琴の容器であることを唱えたのは、上述の方建軍を嚆矢とする（方 2008）。

陝西省は、中国のほぼ中央に位置し、北は内蒙古自治区、東は山西省、東南は湖北省、西は寧夏回族自治区などと接している。秦の都咸陽、前漢・唐の都長安があった地であり、兵馬俑で有名な秦の始皇帝陵は省都・西安にある。

宝鷄市は西安の西隣にある地域で、秦公一号墓は、1976 年から 1986 年にかけて発掘調査が行われた。編磬などの儀礼楽器・金・銅・玉石・陶・漆・木器など多種類の副葬品を伴う、春秋時代中期の規模の大きなものである。出土した石磬に刻まれた銘文から、墓主は、秦の景公（在位紀元前 576 ～ 536 年³⁷）とされる（黄 1989）。

口琴ケースは、185 名を数える殉死者の一人の持ち物であったと思われる。方建軍の調査・採寸によれば、両端の径の異なる竹製の筒で、表面には漆が塗られ、一端は開口、もう一端は閉口、全長 335mm³⁸。筒身に指孔やリードを取り付けるための開口部はないため、笙や竽の管である可能性はない。表面には、「竅之寺簧」の四文字が墨書されており（fig. 19）、「竅（という名の人物）の持つ（寺＝持）『簧』と解釈するのが妥当である。ここに書かれた「簧」とは、口琴のことである（方 2008）。

この「簧」という字の指し示すモノが、日本語で「口琴」と呼ばれる楽器であるという「説」（というよりも「事実」と言うべきなのであるが）は、一般には馴染みがないと思われる。口琴という楽器の存在があまり知られていない、中国の漢文化において、そしてその影響下にある日本においても、「簧」＝「（笙などの）リード」だとする解釈や、「簧」＝「笙の代名詞」とする（口琴を研究する側から見たら曲解としか思えないような）見方の方が優勢であったようである（柿木 1955）。確かに「簧」には「笙などのリード」の意味もあるのだが、他にも『『口琴』という、別種の楽器を指し示す用法もある』という事実を無視しては、話は混乱するばかりである³⁹。

『世本』『作篇』に見られる「女媧作笙簧」のような記述に関して、女性の顔と蛇体を持つ始祖神・女媧が作ったのは、「笙と口琴」である、ということは、単純に考えれば自明であり、



fig.19 中国陝西省宝鷄市鳳翔県南指揮の秦公一号墓から出土した、口琴ケースに書かれた文字。王輝 1997 より

「笙と笙」あるいは「笙のリード」とする解釈は、文脈上不自然であるといわざるをえない。もちろん女媧は神話上の人物であり、本当に笙と口琴を創出したわけではない。重要なのは、古代中国では、「笙」と「簧」はほぼ対等の位置を占める別の楽器であった、ということである。

漢族の笙類の原型となったと思われる、タイやベトナムの山岳地帯や、雲南省・貴州省など中国西南地方に住む諸少数民族の蘆笙や葫蘆笙は、現代においても、口琴と一組で、特に恋愛の場面で語られる場合が多い⁴⁰。笙のリードと口琴とは、構造的にも、枠の間に切り出された振動弁（フリーリード）という、基本的に同じ形態をそなえており、同一起源と考えられても全くおかしくない。同様に、同じ概念を表す単語で呼ばれても不思議はない。両者の大きな相違点は、1) 弁を振動させるための方法が、呼吸による気圧の変化を利用するのか、振動弁に直接・間接の物理的な衝撃を与えるのか、ということ⁴¹。そして、2) そこで発生する音を、リード部分と一体化した竹筒の共鳴器に響かせるのか、演奏時以外には分離・着脱の可能な、人間の口腔に響かせるのか、という違いのみである⁴²。

はるか昔には対等であったはずの笙と口琴であるが、何故口琴の方が漢族を中心とする中国文化の中で忘れられていったか、というのは、単に「民族の音（や見た目）の好みや感性に合わなかったから」と解釈するしかない。一方の笙は、曾侯乙墓出土の6点の彩漆笙（東周、戦国初期。紀元前約433年。湖北省博物館編2005）をはじめ、中国文化における重要な楽器のひとつとしての地位を獲得し、日本の雅楽にまで伝わったことは言うまでもない。これに対して、口琴があまり注目されなくなっていくことは、中国の歴史的な絵画や彫刻などを概観するだけでも明らかである⁴³。笙は多くの図像学的な資料が残されているのに対して、口琴は、少数民族や「周辺民族」のものとしての扱いが通常で、中央で再認識されるのは、女真族に起源をもつ清代（17世紀前半～）を待つ必要がある⁴⁴。

竹筒を口琴のケースとして利用する例は、現代の民族例でも、枚挙に暇がない。とは言え、その多くの場合、両端の直径はそれほど差のない、円筒形である。両端の直径を含む、筒全体の形状を確認するまでは、本当に口琴のケースとして使用可能なのか、あるいは笙や竽の管であるのか、全く異なる用途のものなのか、といった推測さえ始められないのではあるが、もしも墨書に記された文字の解釈が正しく、口琴のケースであるとすれば、中に入っていたのは、A / B どちらのタイプの口琴だろうか。湾曲状のBタイプのものであるとすれば、かなり小型のものでなければ、収まらないのではないだろうか。収まったとしても、33cmを超える長さは必要ないだろう。やはり、薄板状のAタイプの物が入っていた可能性が高いと思われる。

なお、墨書の図版 (fig. 19) は比較的容易に確認できたが、竹筒そのものの写真や図版は、未見。これは、容器としての重要性より、そこに描かれた文字の研究に重点が置かれてきたためと考えられる⁴⁵。この資料を保管しているのは、陝西省考古研究所とのこと（王2000）なので、より詳細な情報を収集したい。

9. 韓国 Korea [15]

現時点で全く確認の取れていない情報であるが、今後期待して、書き留めておく。2016年10月、中国湖北省武漢で開催された第十回国際音楽考古大会で、韓国の音楽学者、漢陽大・音大・名誉教授の權五聖氏より、下記の情報を得た。

「数年前に、韓国北部⁴⁶の遺跡で韓国とロシアの共同発掘調査が行われた。出土した遺物のひとつを、ロシア人の考古学者が『ヴァルガン варган』という楽器であると言った。韓国側の考古学者は、『ヴァルガン』が何なのかわからずに、自分（権氏）に問い合わせがきた。自分も最初は何か分からなかったが、調べた結果、口琴のことだと判明、その旨を回答した。『ヴァルガン』が口琴だと判明したのは、2015年のことだが、発掘の年代、問い合わせを受けた時期、発掘場所、担当の考古学者の名前などは、すぐには思い出せない。A/Bどちらのタイプであったのかもわからない。」

ロシアとの共同調査であれば、ロシア側でも何らかの報告が出ているのではないかと考えて、少々探ってみたが、手掛かりがあまりにも少なく、現時点では具体的な詳細は一切不明である。出土資料や、報告書の存在の確認が急務である。現在は口琴が全く使用されないことがない朝鮮半島における、非常に貴重な遺物であることは間違いない。

10. ロシア連邦バシコルトスタン共和国 Republic of Bashkortostan, Russia [16]

バシコルトスタンは、ウラル山脈南部にまたがる、ロシア連邦内の民族共和国である。国土の大部分はウラル山脈の西側に位置するが、一部東側、すなわちアジアに位置する地域もあり、国土内には、ヨーロッパとアジアの境界の碑が建っている。口琴 (fig. 20, 21)⁴⁷が発掘されたイデルバエヴォ古墳群 Идельбаевские курганы があるサラヴァト地区は、共和国の北東部に位置するが、ウラル山脈の西側にあり、地理的に厳密な意味では、アジアには含まれない。しかしながら、出土口琴の形状と構造は、一般的なBタイプ（湾曲状）のヨーロッパおよびアジアの口琴とは、明らかに一線を画すものであるばかりでなく、現在はアジア地域のみに見られるAタイプ（薄板状）の口琴の一種としても、他に類例をほとんど見ない、ユニークなものである。このため、本稿では考察の対象とする。

マジートフ Мажитов 1981によれば、口琴は、1972年に、9～10世紀のものと推定される第6号墳墓の第1墓より発掘された。「第6墳墓は、直径6m、高さ15～20cmで、二つの墓が発見された。第1墓の大きさは1.80×0.55m、深さ65cm。遺骨は発見されなかった（おそらく崩れ去ったものと思われる）。墓穴の西端、おそらく遺体の頭部付近に土製の容器が発見された。その近くに、銀の鏡、青銅のペンダント、8個のガラスのビーズが出土。墓の中央部、ほぼ腰の位置には、3個のベル、小さなラップ状の（ベルトに）下げるもの、そして、中央部に切り込みのある、銀（？）の薄板状のものが発見された。それは、クビズ⁴⁸という楽器を容易に

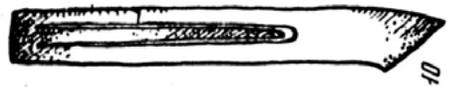


fig.20 ロシア連邦バシコルトスタン共和国、イデルバエヴォ古墳出土の口琴 [16] 実測図。マジートフ 1981より



fig.21 同上、[16] 写真。筆者撮影

思い起こさせるものであった。」(邦訳筆者)。また、これらの副葬品の特徴から、口琴の持ち主は女性であったと考えられる(イヴァノフ、ゴルブコーヴァ Иванова, Голубкова 1997)。

筆者は、2003年にバシコルトスタンを訪れた際、報告書の著者であり、バシコルトスタン大学考古学部教授であったニヤズ マジートフ氏と会見し (fig. 22)、首都ウファの考古学民族学博物館に保管されている発掘品を実見する機会を得た (fig. 21)⁴⁹。その際の計測によれば(報告書にはサイズの記載がない)、全長約65mm、幅は、一辺約9mmの、ほぼ長方形だが、弁の先端側の枠の、持ち手に相当する部分が、少々湾曲したような形をしている。振動弁の形状は、先端のわずかに狭い、縦長の等脚台形。



fig.22 発掘された口琴を手にするニヤズ マジートフ。2003.3 筆者撮影

素材は、報告書にある「銀？」ではなく、青銅か、銅と思われる⁵⁰。形状と、厚みが一定でないことから、ナイフのような道具の再利用の可能性も考えられる⁵¹。枠の一部(二つの長辺のうち、長い方の、弁の付け根側の端から20mm程度のところ)が折れている。

注目すべき点は、弁の付け根側には、枠にも弁自体にも、弁の起振のための引き紐を通す穴がないことである。この事実に対しては、以下のようないくつかの説明が考えられる。

- 1) 「枠の端を弾く A1 タイプの口琴である。」
- 2) 「引き紐を有する A2 あるいは A3 タイプのものに、穴をあける前の、製作途中段階のものであり、完成品ではない。」
- 3) 「引き紐は、振動弁の根元に引っ掛けるように輪にしてセットされていたものが、失われた。」

説明3)のような引き紐のセットの仕方は、現行の民族例として、現在バシコルトスタンに住むバシコルト(バシキール)民族(チュルク語系)の、薄板状の紐で引く口琴アガスクムイズ agas kumydh がある (fig. 23)。しかしながら、アガスクムイズは木製で、しかも振動弁の切り出が開始されている二か所には、ドリルで一度穴をあけて、紐に対する剪断力をなるべく軽減するような工夫が見られる。青銅のような金属板を素材とする口琴の弁の根元に、何の工夫も施すこともなく、引き紐を取り付けたとすれば、数回の演奏で紐は切れてしまうだろう。

とすれば、この口琴は、弾くタイプ(A1)のものであると考えるのが自然だろう。この口琴の持ち手部分は、実測図からもわかるとおりに比較的長く、またある程度の厚みもある。フィリピン・ミンダナオ島のクンビンやカンボジアのアンクオッチなど、東南アジアのA1タイプの現行の口琴は、多くの場合、枠の、口に当てる部分(弁の先端付近に相当)から持ち手にかけての部分が、分厚くしっかりと作られており (fig. 24)、しかも持ち手は長く形成され、弁の振動を「持ち手」で支えるような構造になっている⁵²。これらの例と並行して、例えばラオスやベトナム北部のモン族や、フィリピン北部ルソン島のカリング族の、真鍮製のA1タイプの口琴は、持ち手部分がかなり短く、華奢に見えるものも存在する (fig. 25)。

特に、カリング族のオンナット onnat (fig. 25 上) は、筆者蔵の例を計測すると、全長

93mm、弁の長さ約51mmに対して、持ち手部分が30mmと短く、全体の形状の印象も、[16]とかなり似ている。[16]も、杵の持ち手部分は20mm以上の長さがあり、しかも、弁の付け根側に比べて、かなり厚く、この楽器がA1である可能性を高くしていると思える。と同時に、2)の「紐口琴に、穴をあける前の、製作途中段階」説は否定されうる（なお、[01]と同様、弁の先端部に、比較的大きな円形の隙間が認められるが、これは、「持ち手の紐を通すためのもの」というよりは、振動弁の切り出し作業における第一段階として、製作の都合上開けられたものである可能性が高い）。

[16]と一般的な東南アジアのA1タイプの口琴との相違点を他に挙げるとすれば、楽器全体に渡って、杵と弁の双方の各部の厚みが細かく調整されていない点や、弁の付け根側の杵の先端に、弾くための突起が形づくられていないなどが挙げられるが、これもカリंगाのオンナットの特徴とは不思議にも共通している。イデルバエヴォの出土例のような口琴は、非常に限られた現行例しかないとは言え、世界に全く存在しない訳ではないのである。

アジア地域と隣接してこそいるが、東南アジア（そしてフィリピンのルソン島）からは遠く離れた、地理上のヨーロッパ地域に、ある時期、薄板状のA1タイプの口琴が存在していた、という事実は、口琴の歴史を塗り替えるものであるといえる。

現在のバシコルト民族は、金属製の湾曲タイプの口琴を伝統的に持っており、加えて、それほど優勢ではないが、先述したように、木製のA2タイプの口琴も使用している。これらの民族例が、どのように出土口琴と繋がっているのか、あるいはいないのか。あらためて検討する必要がある（木製口琴アガス クムィズは、名称からもチュルク系の口琴の流れの一環として解釈され得る）。

現在この地域（特に西隣のタタルスタン共和国）では、ロシア語でガルモーシカなどと呼ばれる、鍵盤式やボタン式のアコーディオンタイプの楽器が大変隆盛であり、人々のフリーリードの発する音に対するこだわりの原点があるようにも感じられる⁵³。いずれにせよ、この謎の多い、ヨーロッパ地域の薄板状の口琴の位置づけは、慎重に行う必要がある。

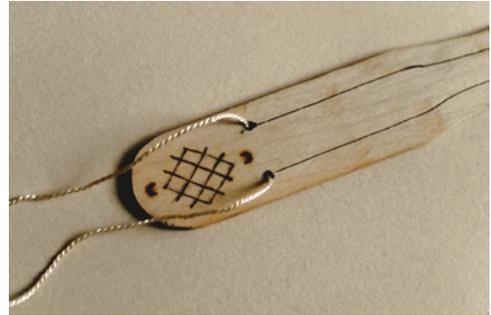


fig.23 バシコルトの木製口琴アガス クムィズ（現代の物）。紐の取り付け部の拡大図



fig.24 カンボジアの竹製口琴。弁の先端部から持ち手の部分にかけては、分厚く作られている



fig.25 フィリピンのカリंगा族の真鍮製口琴（上）と、ラオスのモン族の真鍮製口琴（下）

11. ロシア連邦、カマ川流域 Prikamye, Russia [17 ~ 51]

[16] 以外にも、同タイプの薄板状の口琴およびその部品と思われる遺物が、オビ川の支流であるカマ川流域地域から、多数発掘されている⁵⁴。詳細は、イヴァノーフ、ゴルブコーヴァ *Иванов, Голубкова 1997* にまとめられており、本稿ではその内容を概観するに留める。残欠、破片のようなものも多く、中には、口琴かどうか明確ではないものもあるように思えるが、ロシアの考古学会では口琴の残欠として認められているらしい。それぞれの口琴の、発掘場所、墳墓名、時代、文化名、出土状況、採寸、所蔵などの情報は、大まかな物だけでもかなりの分量になるので、別の機会に掲載する。また、報告書原本に当たったり、所蔵先に問い合わせたり、といった作業もまだ行っていない⁵⁵。

同論文では、ロシア連邦タタールスタン共和国、キーロフ州、ウドムルト共和国、ペルミ地方、そして上記のバシコルトスタン共和国の [16] を含む、ウラル山脈の西側、カマ川流域の広大な地域（地理上はヨーロッパ）の 19 の遺跡で発掘された、金属製 26 点 (fig. 26) [17-39, 42, 46, 16]、および骨や角製 9 点 (fig. 27) [40, 41, 43-45, 47, 48-50]⁵⁶ の、合計 35 点の薄板状の口琴が取り上げられている。残欠や、製作途中段階のものも含む。時代は、紀元前 2 世紀から、紀元後 13 世紀に及ぶ広い幅があり、特に 10 世紀頃の例が多い⁵⁷。

イヴァノーフ、ゴルブコーヴァは、35 点の内、21 点は墓から発見され、内 16 点は明らかに（あるいはおそらく）女性、しかも成人の女性だけではなく、少女の墓からも出土

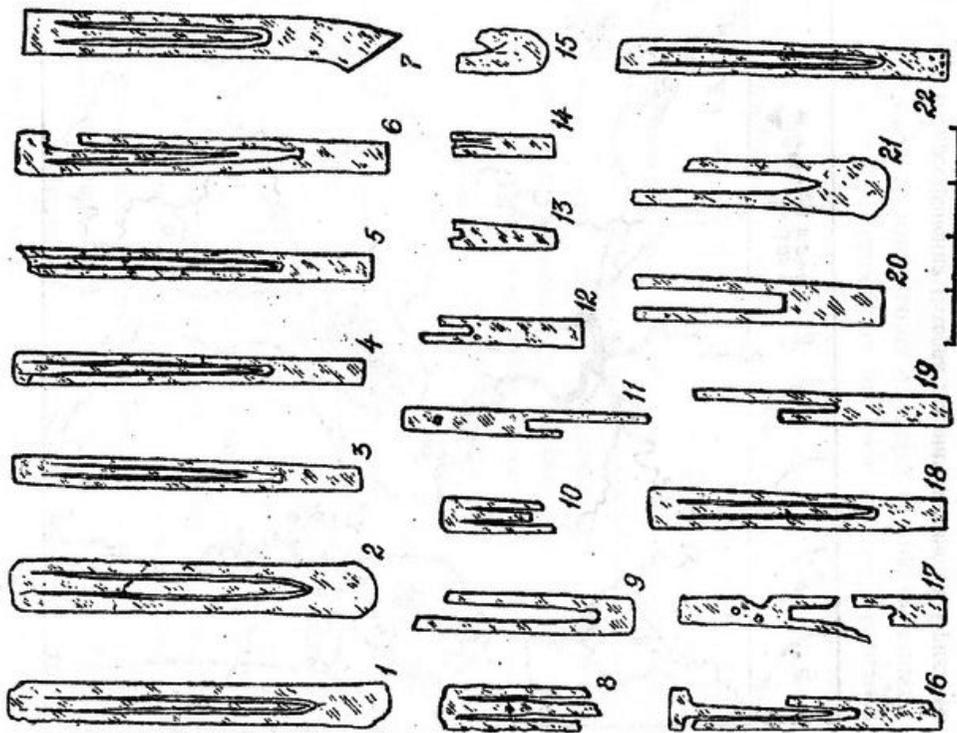


fig.26 カマ川流域地域の青銅・銅などの金属口琴。
イヴァノーフ、ゴルブコーヴァ 1997 より

し、一点は55-60歳の男性の墓から出土した、としている。おそらく死後の世界での必需品として副葬されたのであろう。また、楽器と同形の板の上で発見された例も報告しており、板に当てて（あるいは2枚の板で挟んで）、紐で巻いて楽器の保護ケースとしていた可能性に言及している。

これらのカマ川流域の口琴群のうち、何らかの紐を通すためと思われる穴が開けられているものは、金属製に2本（fig. 26の「11」と「17」）、骨製に4本（fig. 27の「2, 4, 6, 7」）あるが、「弁の付け根側に開けられた、引き紐を結ぶための穴」であると積極的に認められるのは、骨製の一本（fig. 27の「2」）のみである。骨製の「6, 7」も、穴の位置は弁の根元側ではあると考えられるが、根元からの距離が遠すぎる。飾りや、持ち運び用の紐を通す、あるいは壁に打った釘に掛ける？（Иванов, Голубкова 1997）ための穴だろうか。

上記から言えるのは、全体の形状が判然としているものの殆どがA1タイプ、すなわち弾くタイプの薄板状の口琴ということである。これらの口琴を概観してみると、やはりフィリピンのカリंगा族の真鍮口琴オンナットとの共通点が気になる。かといって、東南アジアの島嶼の山岳地帯と、ヨーロッパ地域東端において、直接的な交流があったとは考えられない。とすれば、素材や、製作技術上の必然によって、似たものが出来上がるのだろうか。また、どうしてヨーロッパ地域では、薄板状の口琴が使われた時代があったにもかかわらず、現在まで伝わらずになくなってしまったのか。解明が待たれる。

第2部のおわりに

今回は、Bタイプの、湾曲状の金属口琴を採り上げ、アジアの発掘口琴全体のまとめと考察を行う。

新しい情報も、ある程度確認がとれれば随時盛り込むつもりなので、読者諸氏の情報提供を仰ぎたい。

註：

- 30 古い順に並べるとすると、この例を1.にし、昨年の論考の1.から6.は、順送りに後ろにして、2.から7.とすべきである。
- 31 この論文の主題は、8.で取り上げる陝西省の「墨書竹筒」。
- 32 2016年10月21日～25日、中国湖北省武漢で開催された第十回国際音楽考古大会では、同組織委員会のメンバーであり、天津音楽学院の副院長を務める方建軍氏ご本人に面識を得た。今後の情報収集に大きな力となっていただけることは間違いない。

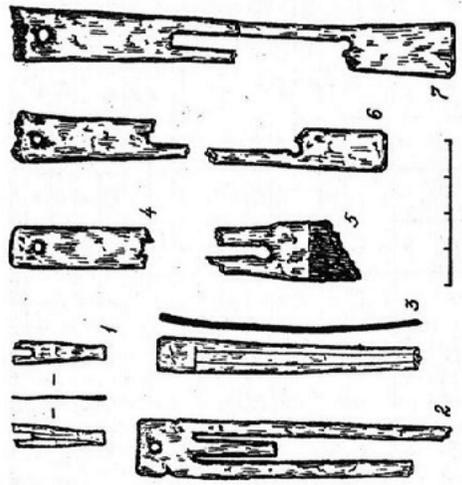


fig.27 カマ川流域地域の骨、角などの口琴。
同上

- 33 方 2008 では、「1987 年に『几件』の口琴を視察」と記されている。「几件」は日本語で「少数」の意だが、実数の記載はない。報告書「建平水泉遺址發掘簡報」（遼寧省博物館、朝陽市博物館 1986）には、発掘された口琴そのものに関する記述が見られない。出土品全てを検証した詳細な報告書が後に出版されたのかどうかも不明。このため、本当に 1976～78 年の発掘調査で出土したものかどうかについてもはっきりしない。今後、朝陽市博物館に問い合わせ、可能であれば実地調査も行いたい。なお、他の遺物に関しては、日本の研究者との共同調査も断片的にはあるが行われている模様（秋山 2000）。
- 34 2016 年 4 月、コルトヴェイト Kolltveit との E メール交換による情報。その後、コルトヴェイトは、第十回国際音楽考古大会（註 32）で、この 2 点の口琴についての発表を行った（発表要旨は Kolltveit 2016a）。発表論文集にても近日中に公刊の予定。
- 35 本稿では、展示されている、存在の明らかな 2 点のみに番号をふり、仮に [12, 13] とするが、註 30 と同様の理由で、本来は [1, 2] とすべきである。
- 36 口琴のタイプ分類に関しては、直川 2016 を参照。
- 37 在位は、紀元前 577～537 年とするものなど、1 年程度の誤差で諸説ある。ここでは方 2008 に従う。
- 38 両端の直径の採寸や、どちらが開口かの記載はない。
- 39 「笙」と「簧＝口琴」とが別の楽器である件については、柿木吾郎が 1955 の論考で看破している。なお、「簧」には他にも、「バネ」の意味もある。
- 40 例えば、拉祜族の例（龍 編 1986 p. 246）など。青年が葫蘆笙を、少女が口琴を演奏するとされる。
- 41 口琴の弁を息で振動させる特殊奏法もある。
- 42 例えば、傣族の例（夏 採集・整理 1990）など、蘆笙の起源を口琴とする伝説も存在する。とは言え、柿木 1955 の仮説のように、笙が「口琴から発生した」のかどうかは、熟考の余地がある。
- 43 中国音楽文物大系のシリーズ（中国音乐文物大系总编辑部 編 1996～2011）全 16 卷（第二輯含む）など。
- 44 文献学的・図像学的な精査は、改めて行う必要がある。
- 45 王 1997, 2000 では、資料は「漆筒墨書」として扱われている。「書」を重視した表記である。
- 46 「韓国北部」なのか「北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）」なのか、言葉の問題もあり、確認ができなかった。韓国と北朝鮮の学者間の交流がどの程度密であるのかわからないが、ここは一応「韓国北部」ではないかと推測しておく。
- 47 情報提供は、フレデリッククレイン（直川 2016）、バシコルトスタン共和国の口琴奏者ローベルトザグレッヂーノフ Загреддинов, Р.（どちらも 2003 年）ほか。
- 48 バシコルトスタン共和国の基幹民族であるバシコルト人の言語（チュルク語系）で「口琴」の意。
- 49 マジートフ氏との会見にあたっては、ザグレッヂーノフ氏、民族楽器演奏家ガイサーロフ Гайсаров А. 氏ほかにご尽力いただいた。
- 50 会見時には、マジートフ氏も青銅か銅であるという意見に賛成され、銀の可能性は低いとした。

- 51 ザグレッチーノフの見解。
- 52 一方、A2、A3 タイプのいわゆる「紐口琴」は、持ち手の部分は、薄く短く作られている。「手で持つ」ことによって、楽器全体の振動が少なからず殺されてしまうが、その影響をなるべく小さくするような構造になっている。紐や布などを使った持ち手が取り付けられる場合もあり、これも、引き紐による「引く力」に対しては対抗するが、弁の振動と、それを助ける楽器自体の表裏方向の振動にはなるべく影響しないようにする工夫である。
- 53 アコーディオンやバヤンなどのフリーリード楽器は、中国の笙が 18 世紀にヨーロッパへ伝えられたことを起源とする(柿木 1955)。笙を参考に、ドイツで開発されたアコーディオンがロシア経由で、バシコルトスタンやタタルスタンにも伝わったと考えられる。
- 54 情報および資料提供は、モスクワの音楽家・口琴研究者ベスクローヴヌイイ Бескровный, А.
- 55 より詳細な情報は、イヴァノフ、ゴルブコーヴァ Иванов, Голубкова 1997 中の参考文献を参照。
- 56 それぞれの口琴の番号は、イヴァノフ、ゴルブコーヴァの並べ方に従う。ただし、どのような基準に従って、並べられているのか、いまひとつ明確ではない。同文献の図版中の並び方とも一致しておらず、また、これとは別に存在する、採寸の表の順番とも一致していない。
- 57 ベスクローヴヌイイ Beskrovny 2013 に、イヴァノフ、ゴルブコーヴァの論文に含まれていない、ペルミ地方のもう 1 点 [51] の情報と写真が掲載されている。

参考文献：

秋山，進午．

2000 東北アジア民族文化研究．同朋舎．

Beskrovny, Aksenty.

2013 Jew's Harps in Russian Archaeology (unpublished).

方，建军（方，建军）．

2008 秦墨书竹筒与乐器“簧”．交响—西安音乐学院学报．no. 1. p. 5-6.

湖北省博物館 編．

2005 曾侯乙墓 出土文物陈列．

Иванов, Александр, Голубкова, А.

1997 Древние варганы Прикамья. Вестн. Удмурт. ун-та. no. 8. p. 93-107.

柿木，吾郎．

1955 笙の発生について —フリー・リード発生に関する假説—．フィルハーモニー．no. 27. p. 44-49.

Kolltveit, Gjermund.

2016a 考古发掘的最早的口弦：辽宁省夏家店遗址的一个考古发现．第十届国际音乐考古大会 人类学视野下的音乐考古 会议手册．p. 27. The Earliest Excavated Jew's Harps: A Find From a Lower Xiajiadian Site in Liaoning Province. 10th ISGMA Symposium 2016 (Wuhan) Music Archaeology from the Perspective of Anthropology Conference Guide.

2016b Jew's Harps of Bone, Wood and Metal – How to Understand Construction, Classification and Chronology. Studien zur Musikarchaologie X. p. 63-73.

黄, 晓芬.

1989 陕西省における秦漢考古学の現状. 京都府埋蔵文化財情報. no. 34. p. 1-13.

辽宁省博物馆, 朝阳市博物馆 (遼寧省博物館、朝陽市博物館).

1986 建平水泉遗址发掘简报. 辽海文物学刊. no. 2. p. 11-29.

龙, 生庭 (龍, 生庭) 編.

1986 婚俗趣话. 光明日报出版社.

Мажитов, Нияз.

1981 Курганы Южного Урала VIII – XII вв. Наука.

直川, 礼緒.

2016 アジアの発掘口琴チェックリスト (1): 薄板状の口琴 (1). 伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要. vol. 5. p. 57-70.

王, 辉 (王, 輝).

1997 秦文字释读订补 (八篇). 考古与文物. no.5. p. 75-81.

2000 秦出土文献編年. 新文豊出版公司. p. 43-44.

夏, 承政 採集・整理.

1990 葫芦笙の由来. 口琴ジャーナル. no.1. p. 20-21.

山口, 修.

1969 楽器分類学序説. 武蔵野音楽大学研究紀要. no. 3. p. 187-197.

中国音乐文物大系总编辑部 編.

1996 ~ 2011 中国音乐文物大系.

The Jew's harp is an ancient musical instrument distributed all over the world, especially on the Eurasian continent. Though not as many as in Europe, a certain number of historical Jew's harps have been excavated in Asia. As the second part of the article, 7) the oldest Jew's harps from Liaoning province, China (22-11th centuries BC.), 8) bamboo possibly-container of a Jew's harp from Shaanxi province, China (6th century BC.), 9) unverified example from Korea, 10) bronze(?) plucked Jew's harp from Bashkortostan (9-10th centuries), and 11) bronze, copper, bone and horn Jew's harps (including remaining broken parts) from Kama river basin, the easternmost part of Europe (from the 2nd century BC. to the 13th century AD.) are discussed.

直川礼緒 2016 アジアの発掘口琴チェックリスト (1): 薄板状の口琴 (1).
伝統と創造 東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要 Vol.5

正誤表

p. 66 註 6	×昭烏達盟	○昭烏達盟
p. 68 註 27	×注 26	○註 26